

観測点

ピューリッツァー賞受賞の順がもたらされるリスクもドキュメンタリー作家リチ考えておかななくてはならなヤード・ローズが米国の著。風力は投入したコンク名な外交専門誌「フォーリ」リートや鉄材のわりに効率ン・アフェアーズ」の一・二が優れず、そればかりでな月合併号に論文を発表し、カリフォルニアのウインた。これがちょっとした話ド・ファームだけで貴重な題になっている。ローズ氏鷹を含む鳥類が何百羽も殺は、大書「原子爆弾の誕生」されている。百万キロの天で、原子爆弾をこの世に登然ガス火力は、一日あたり五場させた科学者の栄光と葛・五つの硫酸酸化物、二十一藤とを克明な取材で描き、一の窒素酸化物、二・六の日本にも多くのファンがいる。酸化炭素を放出する。る。今回の論文はロス・アラ一方、原子力発電は反原モス国立研究所のデニス・発団体の主張にもかかわらずベラー氏との共著だが、こアジア諸国で重要な役割を果うな原子力発電推進論なのたしている。米国の発電所が。限られた紙面で論旨の平均稼働率も飛躍的によ的確に伝えることはできなくなっている。一キロの石いが、興味をもった点を中炭は三キロ時、同量の石油心以下のように紹介しては四キロ時の発電量だが、おきたい。軽水炉による発電は一キロのウランで四十万キロ時、まず世界のエネルギー消

R・ローズの論文

費は今後五十年後に少なくこれをリサイクルすれば七とも現在の二倍、百年後に百万キロ時(原文ではわざは五倍になる)から、わざ〇を六つならべてい地球環境に大きな負担をかけるを生産する。一キロのけないうでこれを供給するの生産あたり失われる人間のは至難の業だ。石炭火力は生命は、石炭で年間三十七最悪の環境加害者であり、人、石油で三十二人、ガスその汚染物質は米国のだけで毎年一万五千人の死をもたで二人、原子力で一人とさらしている。石炭火力は多低放射線からの影響をしき量の温室効果ガスのみならい値無しとする考えからの、同規模原子力発電所のもので、実際は悪くても無百倍相当の放射能を排出す視しうるリスクだ。る。核不拡散上からみても

石炭にはかなりの核分裂性このようにローズ氏は実物質を含んでいる。事実米に明快な論理を展開していに、原子力開発に對する世論が決して順風とはいえない米国でこれだけの五〇年代に、石炭からの核ことをはつきりするのは勇爆弾用ウランの抽出を検討気のあることだ。原子力をしたではないか。よしとするならばこれぐら

ソーラー発電の太陽電池いのことを言わなければ、は有害廃棄物を生むし、火世論を喚起できないだろ山の噴火で大規模な天候不う。(亀仙人)

時評

そこで提言。答弁の小卓は立って答弁できる高さのものに替えたほうがいい。

さて、閣僚席もモンダイだ。椅子はまあいいとして、閣僚席の前には膝の高さのお茶を置くような小さなテーブルと、二人で挟む形の細いサイドテーブルしか

大江戸ソーラー事情

(26)

石川 英輔

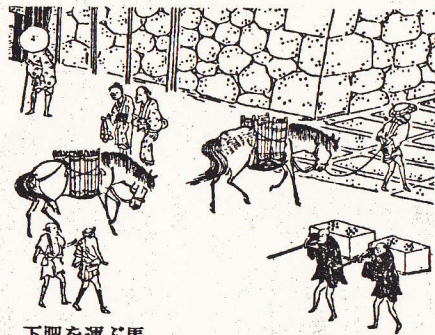
一方通行と回転式 6

江戸時代の農業では、肥料はいつも不足ぎみだった。特に都市周辺の農村では、都市での生活水準が向上するに当たって、肥料はますます多く必要になり、ますます不足ぎみになり、値段はどんどん上がった。

現代のわれわれの感覚では、排泄物の始末をするのには費用を払うのが当然なので、現実には有料の上水を使って流し、下水道料金も払っている。だが、かつては、排泄物はメーカー側つまり排泄した側に所有権があり、肥料として利用する農家が、現金あるいは相当量の野菜による物々交換で買い取るのが常識だった。

化学肥料なら、工場の稼働時間を長くするだけでも増産できるし、どうしても不足すれば輸入する手もあるが、下肥はそうはいかない。一般的にいうと、高級な野菜の方がたくさん肥料なしにはできないのに、下肥の生産量は食べた農作物の量には比例しても、金額には比例しないため、高価な野菜を食べても、消費者が大量の肥料を生産してくれるとは限らないからだ。

下肥の生産量が頭打ちなのに需要は増えたか



下肥を運ぶ馬
『江戸名所図会』より(部分)

ら、時代が進むにつれて下肥はますます貴重になり、江戸では十八世紀後半だけで、下肥の値段が三倍とも五倍ともいうほどに高騰した。五十年間で三倍程度なら高騰のうちに入らないというのは現代人の感覚であり、江戸時代としては、これでも充分に高騰だった。

ものの本によれば、そは一杯が十八文に決まったのは寛文八年(一六六八)で、それが二十文に値上げになったのが幕末期の慶応年間(一八六五〜七)だった。湯銭(銭湯入湯料)が大人一人六文に決まったのが寛永年間(一六四四〜四三)頃で、八文に値上げになったのが天保十四年(一八

「もう二度とあんな思いはしたくないですよ」

制限酒動